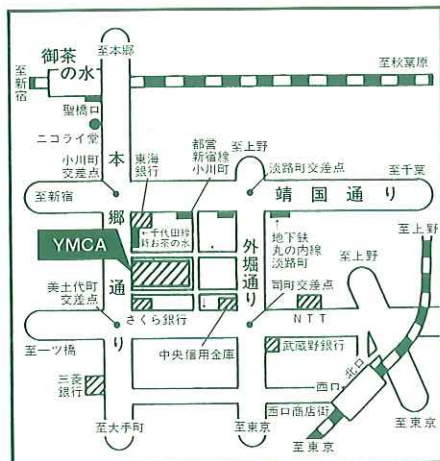


参加対象 教員、社会教育関係者、NGO関係者、一般
 定員 100名
 参加費 7,000円
 昼食 2,000円(11,12日分、希望者のみ)

※なお、なるべくゴミを出さないように、お弁当を持参いただける方はお願いいたします。



東京YMCA国際奉仕センター

JR

- 神田駅 出口(西口、北口)
- 御茶の水駅 出口(聖橋口)

地下鉄

- 丸の内線 淡路町駅 出口(A-2・A-4)
- 千代田線 新お茶の水駅 出口(B-6)
- 都営新宿線 小川町駅 出口(A-6)
- 銀座線 神田駅 出口(北口)

加入者名: ERIC (通信欄に「グローバル・セミナー」と明記してください。)

参加費用振込先 郵便振替口座: 00180-5-710744

〒114 東京都北区東田端1-14-1 岩瀬ビル1F ERIC「グローバル・セミナー」係 ☎03-3800-9416

は昼食代も)は指定の郵便振替口座にお振り込みください。

★参加ご希望の方は、別紙の申込書にご記入のうえ、下記の住所宛にお送りください。また、参加費(昼食を申し込まれる方

後援 文部省、全国高等学校長協会、全国高等学校国際教育研究協議会、開発教育協議会、全国地理教育研究会、東京都地理教育研究会、帝塚山学院大学国際理解研究所

開催日程 1995年11月11日(土)～12日(日)
 会場 東京YMCA国際奉仕センター 東京都千代田区神田美土代町7-1 ☎03-3293-7011

主催 国際理解教育センター(ERIC)
 東京YMCA国際奉仕センター

1995.11.11-12 SEMINAR

国際理解教育研修プログラム「グローバル・セミナー」開催のご案内

GLOBAL

〔開催主旨〕

ますます深刻さを増す環境問題や格差が広がるばかりの南北問題など、地球規模で解決しなければならないさまざまな課題が山積みする現在、一人ひとりが「地球市民」として自覚を持って考え行動することが強く求められています。このような状況を背景に、教育の国際化が叫ばれ、英語教育や帰国子女教育などの実践が行われていますが、1974年のユネスコ国際教育勧告、そして1994年に再度強調された環境、人権、開発、平和等の分野をカバーした広い意味での国際理解教育の取り組みは、現在の日本において未だ十分に行われているとはいえません。

一方、イギリス、オランダ、オーストラリア、アメリカなどでは、教育現場（学校教育、社会教育）でさまざまな形の国際理解教育が展開されており、その実績には目をみはるものがあります。それらの成果の一部は日本にも紹介されるようになりましたが、必ずしも十分ではありません。

このような状況のもとに、青少年育成・国際協力活動等社会教育の推進に110余年の歴史をもつ東京YMCA、そして内外の実践紹介を中心に、国際理解教育の情報提供および研修を実施している国際理解教育センター（ERIC）の共催で、真の「地球市民」を育てる教育方法を学ぶ研修を実施することになりました。

今回のセミナーでは、国内外の講師を招き、写真を効果的に活用できる参加型学習法「フォトランゲージ」の具体的な手法や活動を紹介します。また、参加者自らのプログラムや教材づくりを通して、国際理解教育における「フォトランゲージ」という手法を十分に理解してもらうものです。そしてさらに、このような研修の積み重ねを核に、日本における国際理解教育の内容を深め、その普及を推進しようというものです。

PROGRAM

11月11日(土)

- | | | |
|-------|--|-----------------|
| 9:00 | 受付開始 | |
| 10:00 | 研修Ⅰ | |
| | 「写真教材を使ったワークショップを体験」 | |
| | ①「バナナの来た道」 | 長倉徳生 |
| | ②「地球の仲間たち」 | 高島みゆき／富岡紀子 |
| | ③「Photolanguage Australia, Profiles of Hunger」 | Roslyn McDonald |
| | ④「地球家族」 | 梅村松秀／飯沼慶一 |
| 12:00 | 昼食 | |
| 13:00 | 研修Ⅱ（研修Ⅰと同じワークショップ） | |
| 16:00 | 基調講演 | Roslyn McDonald |
| 18:00 | 懇親会（バナナの試食会、NGOの教材紹介など） | |
| 20:00 | 終了 | |

11月12日(日)

- | | | |
|-------|--|----------------------------|
| 9:00 | 研修Ⅲ | |
| | 「フォトランゲージを使って／つくってみよう」 | |
| | ①「地球家族」を使って | 角田尚子 |
| | ②NGOの写真資料の活用術 | 米田敏裕 |
| | ③市販の写真集（印刷物）を使って、メディア・リタラシーを考える | 福澤郁文 |
| | ④ちまたのGlobal Issue探検隊（自分で写真を撮り、情報の送り手体験をする） | 河村信治 |
| | （昼休み適宜） | |
| 15:00 | ふりかえり／まとめ | コメンテーター
Roslyn McDonald |
| 16:00 | 終了 | |

GLOBAL SEMINAR

●講師紹介

Roslyn McDonald（ロズリン・マクドナルド）
World Vision Australiaの教育担当。シドニー大学教育博士課程在学中。過去10年間、様々な教育現場でフォトランゲージを活用している。

飯沼慶一
私立成城学園初等学校教諭。SMILE（聖マーガレット生涯教育研究所）レンジャー。中京女子大学子ども文化研究所共同研究員。

梅村松秀
都立竹台高等学校教諭。共編著：「地図と生活」「シミュレーション教材の開発と実践」「新高校地理授業の工夫とアイデア」「地域と生活―身近な地域の調べ方・教え方」（いづれも古今書院）

角田尚子
国際理解教育センター（ERIC）事務局長。グリーンピース・ジャパン元代表。1994年4月から事務局長。

河村信治
写真家であり、環境教育トレーナーとしても活躍。都立大学大学院都市科学研究科修士課程在学中。板橋区立エコポリスセンター環境学習指導員。

高島みゆき
開発教育を考える会。1991年4月～1993年4月青年海外協力隊隊員としてトンガ王国に赴任。現在、都立小川高等学校家庭科教諭。

富岡紀子
開発教育を考える会。1983年より2年4カ月青年海外協力隊隊員としてコスタ・リカ共和国に赴任。1992年より2年間、夫の仕事でスリランカに滞在中、音楽教室を開校。協力隊を育てる会のOB支援経費で援助を受け、指導に当たる。

長倉徳男

写真専門学校を卒業後、フィリピンの子供たちの写真を撮り始める。86年、日本ネグロス・キャンペーン委員会（JCNC）設立と共にボランティアとして関わる。現在、JCNCから生まれた貿易会社、オルター・トレード・ジャパンで、広報活動に携わる。

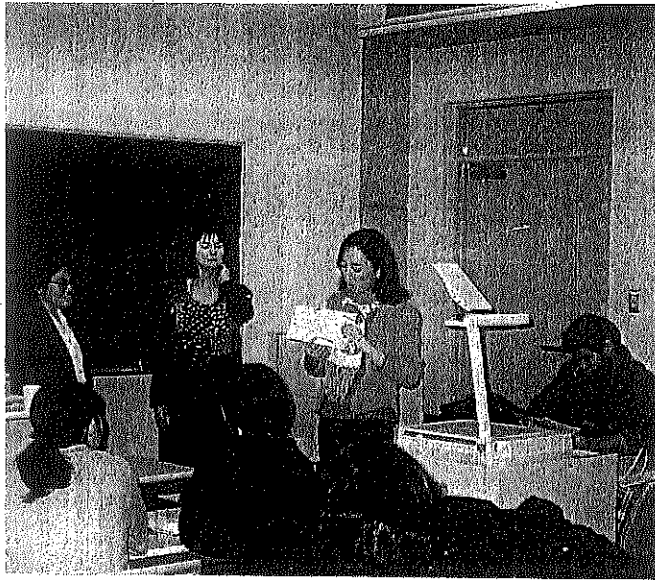
福澤郁文

グラフィックデザイナー。独立戦争直後のバングラデシュへ復興奉仕団の一員としてわたる。帰国後ヘルプ・バングラデシュ・コミティを仲間たちと設立。シャプラニール＝市民による海外協力の会前代表。ERIC運営委員。株式会社designFF代表。

米山敏裕

東京YMCA勤務を経て、1993年より開発教育協議会運営委員を務め、現在事務局次長。1993年4月にグローバル・エデュケーション・センターを設立。

東京造形大学で模範授業



学生が写真をどう読むかを注意深く見守る講師のロズリン・マクドナルドさん

『フォトランゲージ』授業に注目

一枚の写真からどんなイメージが浮かんでくるか。東京・八王子市の東京造形大学の和爾隆教授のゼミで先頃こんな授業が行われた。名づけて「フォトランゲージ」。対象はビジュアル・コミュニケーション専攻の学生。普段、インパクト(言葉を用いない)の素材を使っているデザイン技法に慣れているという学生たちだが、外部講師を招いてのひと味違った授業に、意外な盲点を衝かれたといった形。テーマは「貧困」。こうした手法の授業はすでに海外の中・高校でも行われており、今後注目される授業形態となりそうだ。

講師のロズリン・マクドナルド氏(ロズリン・マクドナルド)は、民間援助団「ストライア」の教育担当。なごを行つた一方、開発、援

写真教材を用いて

参加型の活動目指す

「フォトランゲージ」は、写真教材を用いた参加型の活動で、マクドナルドさんは過去十年間、中・高校をはじめ様々な教育現場でこの手法を活用してきたという。

授業はまず、ペアづくりから。手渡された写真と同じ者同士が一緒にこの写真を見て、各ペアに写真が六枚ずつ配られた。被写体は、人物、抽象、風景の「汚れた家」で、何もないと

いすれか。

マクドナルドさんは「手の元の写真の中から好きな写真を選んで、お互いにその理由について意見交換をしてください」と呼びかける。すると「なぜその写真を選んだのか」について挙手

学生側からの発表が一段落すると「写真の本当の意味がわからなくても、その味について話すことができる」と述べ、短絡的な解釈

いった感じ」など、それぞ

マクドナルドさんは「物の感想を出し合った。これに対してマクドナルドさんは「シンボリックな理由について意見交換をしてください」と呼びかける。すると「なぜその写真を選んだのか」について挙手

学生側からの発表が一段落すると「写真の本当の意味がわからなくても、その味について話すことができる」と述べ、短絡的な解釈

示が出された。

学生たちは、いままでの否定的な発言から一転、肯定的な視点に切り替えて、写真の意味づけをしていた。

マクドナルドさんは「募金集めのキャンペーンなどに使われる写真は、明らかに貧困を表現したステレオタイプ的なものが多い。こうした写真の使い方には、常に子供が使われている。また、意図的に上部から写

か文化の違いにまで気づきにくい。とはいえ、自分や相手の文化的背景に気づいてもらう必要がある。それは写真を見る方の視点にもかかわっていると思う。今日の授業は、その点で面白かった」と話していた。

問い合わせ先・国際理解教育センター(EIRC) 114-1、岩瀬ビル/03-3800-9414

Seminar uses photos to teach values in schools and companies

Photos can be used in almost every classroom situation to make students rethink their ways of looking at the world.

By **KAZUNAGA FUKUSHIMA**
Asahi Evening News

Photographs can be used effectively as teaching aids in high schools, colleges and companies, participants at a recent seminar on using pictures learned.

Methods for introducing photographs into classes and other educational scenes were presented at the YMCA International Center in Kanda, Tokyo.

About 100 teachers, university students and non-governmental organization members learned the method while actually experiencing the class-

es given by lecturers. The seminar was sponsored by the Tokyo-based International Education Resource & Innovation Center, a non-profit organization promoting international understanding.

They also learned that photos can also be used for playing an important role in activating discussions within groups to solve common problems.

Keiichi Iinuma, a teacher at Seijo Gakuen Primary School, demonstrated how to use photographs in company orientations. The goal of the orientations is for newcomers to learn the importance of cooperation and self-assertion.

Iinuma taught participants how to learn the differences between facts and imagination in photographs. He also explained how to solve specific problems through cooperation.

Iinuma first divided about 30 participants into six groups. He then gave each group a set of 10 photographs showing people from Nepal, Israel, Holland, and other countries around the world. Each photograph showed a family and all of their belongings set outside in front of their houses.

In the first part of the lecture, he had all the participants select their favorite picture and explain why they chose it to the other members of their group.

Each group then looked at a picture from the Netherlands from among the 10 pho-

tographs, and spoke about the interesting facts they found.

"There are eight members in the family, including three children and a grandmother. They have a car, a sofa and a refrigerator," one man said.

Then, each group commented on the photograph, letting their imaginations run away with them.

"The family are not very poor considering their belongings. All members of the family are smiling. They seem to be friendly and familiar with neighbors. They are a three-generation family. The grandmother might be a teacher at a nearby school, judging from her look on face and her belongings. The family maybe earn money by cross-border smuggling on bicycles."

Iinuma said a photograph is not necessary a record. Sometimes the photograph has a certain message unto itself.

Katsunori Sato, a teacher at junior high school affiliated with Joetsu University of Education in Niigata Prefecture said, "Such a class can be conducted in group-oriented situations. I am now working on revising the curriculum in my school. The demonstration gave me a hint on how to create a new curriculum."

Iinuma then had each group put the set of photographs in order of how wealthy the families appeared. The groups had to come to a consensus within 30 minutes.

However, the task was so difficult, none of the groups made the deadline.

They could not agree on a definition of "wealth." Most members could not decide



KAZUNAGA FUKUSHIMA/ASAHI EVENING NEWS

Participants at a seminar attempt to put family photographs on a desk by order of wealth.

whether wealth was judged by belongings, or the spirit.

"If you want to decide the order without opposition, you should apply specific standards such as the expressions on the family's faces, their belongings, security, the surroundings, food and other factors. Then all the members must agree on one standard," Iinuma said.

"The lecture was conducted

to make the participants aware of diversity in their 'sense of values.' And to make them rethink 'their own sense of values.'

"This kind of class is effective for training newcomers to companies," he added.

Roslyn McDonald, from World Vision-Australia's education department, a British non-governmental organization designing environmental projects

around the world, demonstrated how to use photographs as teaching materials.

She also divided about 30 attendants into six groups and distributed a set of seven photographs showing people and landscapes in underdeveloped nations, including Bangladesh, Cambodia, Sudan, Somalia and Kenya. Each group selected a photograph which showed poverty

the most clearly. Then a representative explained their group's choice to the other participants.

In Australia, photos are frequently used in brainstorming, she said. They are also used in primary school social studies classes to teach the importance of international understanding, as well as geography and economics classes in high schools.



KAZUNAGA FUKUSHIMA/ASAHI EVENING NEWS

Roslyn McDonald lectures on using photos in the classroom.